

## 圖案科

圖案科は上記の諸科より遅れて明治二十九年に西洋画科とともに開設された科である。主任教授は福地復一で、第一教室（工芸圖案）を福地が担当し、第二教室（建築裝飾）を塚本靖、大沢三之助らが担当した。同科の実習には「絵画」の科目もあり、これは横山大観と寺崎広業が担当した。同科の実習教程の記録は現存せず、ただ、雑誌記事によって授業の概要を知るのみである。

左記は圖案科設置直前の福地復一の談話筆記であり、授業方針ないし抱負が示されている。

○圖案科の新設 京都美術工藝學校に於ては、曩に既に圖案科を設けて生徒を教育なし居たるか、東京美術學校にては來る九月より此科を設け、學理技術の進歩を計るとは豫て聞及ぶ處なりしが、本月此事に就て來京せし、同校教授福地復一氏が、一日日出新聞記者に語る處あり、其談載せて同紙上に見ゆ、圖案の美術に關聯せる、尤も見るべき談話たれば、轉載して以て考案家に示す、尙ほ聞く處によれば同氏は先般來圖案を學科として教授する方法に就き、大に研究する所ありし由なれば、本年夏期來京を俟て更に其所見を叩き重ねて詳記せんとす

圖案の美術工藝の進歩に重大の關係を有するは論を待たず歐洲にては未だ一科學として立成つには至らざれども圖案に重きを置くこと殆んど繪畫彫刻にも譲らず其書籍も尠からざれば特に圖案に關する書籍館を設くるさへあり早晚一科學として成立つの時あるを信するなり本邦に於ても夙に此事に就て注目する

所あり然れども實際の成績に依れば圖案上の知識は頗る幼稚なるものにして例へば天平時代の様式に元祿時代の式様を加味して一種奇怪なる圖案を調製し以て新意匠となすが如き不思議なることもあれば又た徒らに時の好みに投ぜんことのみを思ひて時の好みを支配すべきことを遺却するもあり僅かに書家の餘技として従事するのみにて専門に講究するものあらざれば隨ひて斯くの如き弊に陥れるものなるべし今日までは古物搜索時代とも云ふべき時代にして内外人ともに我古美術にのみ注目し専ら其搜索にのみ従ひたれども今や古美術品は既に全く搜索し尽され古美術品を手に入れむことは殆んど容易の事にあらず左れば今後に於ては内國に於ける裝飾上の必要に對しても將た又た海外の嗜好に對しても勢ひ新たなる製作を以て之に應ぜざる可らず然るに美術工藝上其根本とも云ふ可き圖案の進度前述の如し今にして之が進歩發達を計らざれば我工藝品の前途憂ふ可き者あらむ殊に近年に至りては我美術品に對する歐米人の眼識著るしく進んで殆ど其眞價を認識するに至らむとす此際に當りて粗雑なる工藝品即ち所謂輸出向なるものゝ運命能く幾時か保つを得ん此回東京美術學校内に圖案科なる者を設置するは此に見る處ありて圖案の進歩改良を計らむと欲するなり圖案科に於て講究研究すべきは第一に時代の様式なり次には嗜好の異同なり次には建築裝飾に關する者なり時代に分てば推古、天平、藤原、鎌倉、足利、豊臣、徳川等各其趣きを異にし且一時代中にも亦其前後に依りて多少の相違あり是れ時代の様式を研究するの必要ある所以なり又其製作の形狀色彩に就ても研究せんとす

而して別に各時代様式の源流とも見る可き唐宋元明の様式に就ても講修する所なかる可らざるなり蓋し時代様式の研究に就ては歐洲にても實行しつゝあり素より大事業に相違なしと雖も至難の事にはあらず唯材料の調査確實周ならむことを期せざる可らず嗜好の異同を調査することは歐洲などには例なきことなれども各人嗜好の異なるが如く各家各地各國亦隨ふて其嗜好を異にす故に其嗜好を察して美術工藝品を製作せんとするに就ても將た我美術工藝品を以て其嗜好を支配せんとするに就ても深く其異同に就て研究する所あらざる可らず是亦之れを以て研究の一要項となせる所以也次に建築裝飾の事は在來の建築、歐風の建築ともに多少の變化を見るに至るは必然の數なり即ち歐風の建築は我國風をまちへ在來の建築、亦明治の新様式を打建つるに至るは必然の數なり此勢ひに對する建築裝飾の圖案の要、此に於てか愈切なり此勢ひに應じ此勢ひを利導するの目的を以て充分研究する所無かる可らず且つ其成績に依りては或は歐米に於ける建築裝飾を一變するの望みなきにもあらざるをや以上記し來れるものは是れ此九月より東京美術學校内に圖案科を置くに至れる理由の概要なり

〔京都美術協會雜誌〕第四十八号。明治二十九年五月二十八日

これによると、第一には日本各時代の図案の様式およびそれらの様式の源流となつた中国の各時代の様式を研究し、第二に各家各地各国によって異なる嗜好について研究し、第三に建築裝飾の研究を行う方針であつたことがわかる。

福地は前述のように工芸図案が専門であつたが、その授業については香取秀真が次のような回想を残している。

#### 圖案家福地天香先生

明治三十一年三月、東京美術學校騒動の張本人と云はれた天香福地復一先生は反り身になつた様子から、物の云ひ方が、頗る氣取つて見えた所から、キザな奴だと多くの人から嫌はれた。二十九年七月同校に圖案科を新設した時、其の圖案科の教授となつたのが三十五歳で、キザな様子の人ではあつたが、生徒に教へる事が頗る親切で、その教を受けた人達は、今に師恩を感謝して居る。造神宮技師の井上清君はたしか其一人である。古代文様や古器物を模寫して、それを時代別にしたもの教授用として、變遷とか沿革とか又は新古の比較をして懇切に教へられたもので、其の標本や圖面は今に美術學校文庫にある筈だ。私も天香先生の教室に一週一日は必ず興味を以つて出席した一人であつた。

〔香取秀真著『日本の鍔金』昭和十七年。三笠書房〕

右文中の福地が授業に用いた標本や図面というのは、現在本学附属図書館が所蔵している「福地天香遺物」と称する資料があるいはその一部に該当すると思われる。

また、初期の図案科については大沢三之助も次のような回顧談を残している。

## 圖案科の回顧

並に建築科のこと

大澤三之助

明治二十六年の頃と記憶して居りますが、恩師曾爾達藏博士のおともをして、初めて東京美術學校を參觀しましたのは、私が未だ學生の時代でありました。場所は勿論現今の所で、舊教育博物館の建物を校舎として使用してゐたのであります。其日案内役をして下さつたのは、今泉雄作先生でありました。同先生は曾根博士とお知り合ひの仲であつたと思はれます。其時同行の塚本靖君が、今泉先生といふのは日本一の鑑定家だよ、と私に耳打ちをしてくれましたので、先生の芳名を初めて知つたのであります。此日博士の御供をしたのは、塚本と私との兩名であつた様に記憶してをりますが、偶然にも此兩人が後に揃つて圖案科の囑託にならうとは、神ならぬ身の知る由もなかつたのであります。又何かの因縁の様にも考へられてならぬのであります。私共は當時帝大の造家學科（後に建築科と改稱）に修學中でありました故、藝術の方面には深き懂れをもつてゐましたので、此日の參觀は殊更ら面白く感じたのでありまして、狩野邦崖先生の慈母觀音を拜見し、其來歴を承つてひどく感銘したことを覚えております。其當時にはまだ西洋畫科も圖案科も設けられてゐませんでした。

圖案科が獨立科として成立しましたのは、明治二十九年であります。其以前から日本畫科に於て特に圖案を研究された方々がありました。關保之助・島田佳矣・龜岡末吉・安藤時藏等の諸氏が其れであります。中で龜岡君と安藤君とは建築の方面

に進まれ、後には日本社寺建築の權威となられました。其れ故に圖案は獨立した科目としての名目はなかつたのであります。が、其實際は既に成立して居たのであります。而して此圖案といふ言葉は此時代に始まつたものであります。當時歐洲にては専門科目として既に成立してゐた、所謂裝飾藝術（デコラティブ・アート）の意義を取り入れたものと考へられます。而して岡倉校長は圖案といふ名目の下に、此科を設けようとして其時機を待つておられたのが、偶々其教授たる適任者を見出されたので直ちに實行されたものと思はれるのであります。其選に白羽の矢の當つた人は、當時帝室博物館の一員にて、古美術を専ら研究せられて居た若き秀才福池復一君でありまして、岡倉先生の鑑識に叶つて其寵遇を受け、終に圖案科設立と同時に教授に登用され、同科の主任に委ねられたのであります。これが圖案という専門科目が出来た嚆矢であると思ふのであります。尤も藏前の工業學校でも圖案科といふものがありまして、島田佳矣君・井手馬太郎君などが教鞭を取つておられました。が何れが先きであつたか茲に判決を下しかねますが、多分本校の方が先鞭であると思ひます。

明治十五年に工部省所轄の美術學校が廢校となり、以來西洋美術の勢力頓に衰へ、其れに代つて我國固有の美術が漸次擡頭し始め、繪畫に彫刻に又建築に其研究が進められ、歴史の様式が明らかにせられ、隨つて欺界に勢力を得て來まして、歴史の様式を仄めかさぬ作品は、價値なきものゝ様に考へられて來たのであります。此傾向は丁度其當時、西洋の美術界に於て流

行してゐました古様式折衷主義（エクレクテジズム）の風潮と同じ状態でありまして、古物は倍に尊重せられ、新品は其ものゝ如何に依らず、顔色なしの概があつたのであります。「此頃は新造よりも、婆さんの方がもてる世の中だ」、などゝ揶揄するものがあつた位でありまして、現今の新しいが藝術界とは、正反對の局面を表はしておりました。斯の如き歴史の研究が、我國美術界に覺醒の實を擧げたのは事實でありますが、又一方には好古癖のために現代の藝術を視輕して、敗殘酒滅に歸せんとする汚ないものを、稱揚するの弊に陥つた思想を持つ輩も、少數ではなかつたのであります。建築の方面に於ても其風潮がかなり甚だしかつたのであります。一寸其一例を擧げて見ますれば、彼の日光廟の如きは昔から日光を見ずして結構を語るな、などゝ稱揚して天下の偉觀としてゐたのは世人の夙に承知してゐることでありまして、これは必ずしも眞面目な審美眼を通じての、批判でないのは勿論であります。當時所謂美術家と稱するものがありまして、日光廟を批評して唯巨額の金銀を浪費した、俗臭紛々見るに堪へざる駄作であると、けなしてしまつたのであります。これまた當を得た批判とは思はれませぬ。つまり此等の輩は徒らに徳川時代といへば、實際を觀察せずして直ちに惡の斷案を下し、僅かに二六七年位しか時代を隔てゝゐない桃山時代を觀るや、却つて口を極めて其美を稱讚すると言ふ様な状態でありました。話が些か傍路に逸れましたが、當時の圖案科に於ても亦、其時世に相應した教育法を行つて居たことは、よろしく御推察を願ひます。

明治三十年に塚本君と私とが圖案科の講師を拜命しまして、建築の方面を擔當することゝなりました。抑々當校に建築科を置くといふことに就ては、岡倉校長豫てよりの腹案があつたのださうであります。其れが此時に到つて地中の種が漸く萌芽し始めたのであります。勿論當初は未だ建築科といふ名稱はなく圖案科の第二部として、建築圖案を專習することになつてゐたのに過ぎないのであります。本校一覽を見ますと、大正四年の卒業生から、第一部第二部と區別して記載し其以前に於ては區別が見られませぬが、私も初めて圖案科に來ました時、既に此區別が出來たものと覺えております。教室の如きもまた寺子屋式であつて、疊敷きの室に坐して實習を行つてゐましたが、建築志望のものだけは、別室にて背の高いテーブルを据へ、立式で製圖をすることになつてゐました。普通圖案の方は、福池教授一人で擔當せられ別に助教などはありませんでした。建築の方は私等兩人のみで塚本君は主として講義をもたれ、私は主として實習を擔當しておりました。後圖案の方に千頭庸哉君、建築の方に河邊正夫君が助教になられたのは明治三十二年以後と存じます。繪畫は横山大觀君と本多天城君とが受持つて居られ、日本畫風の寫生であつて、動物園から借用して來た動物をモデルとして、机の中央に置き其れを周圍から寫生してゐたのを見受けました。参考圖又は参考書の如きは極めて貧弱なものであつて、圖案の方では教室の一隅に簞笥様のものがあつて、其引き出しの中に時代別にした文様などの参考圖が若干藏められてゐたに過ぎませんでした。建築の方は勿論皆

無でありました故、さし當り帝大の建築科教室から借りて来て、間に合はせてゐたのでありました。尤も帝大の建築科でも参考書類は甚だ貧弱であつて、美校目下の建築科圖書室に比して遙かに劣つたものでありました。

『東京美術学校校友会誌』第十九号。昭和十五年十月

### 第三節 学科授業

#### フェノロサの「美学及び美術史」講義

「美学及び美術史」の科目は本校の創立者であるフェノロサと倉覚三が斯学の研究者であつたことなどにより、学科の中で特に重要な位置を占めていたらしく、開校当初のカリキュラムにおいては普通科第二年で週二時、専修科第一、第二年でもそれぞれ週三時と、多くの時間があてられていた。東京大学などの美学、美術史講座が発足するのはこれよりかなり後のことである。この科目の最初の担当者はフェノロサで、講義の通訳は岡倉がつとめた。講義の内容は、美学講義に関しては塩沢峰吉（大村西崖の旧名）の筆記ノートが参考になる。このノートは罫紙に毛筆で丁寧な清書されており、表紙には

「美学 明治廿三年第一学期筆記

美術学校御雇 エルネスト、エフ、フェノロサ講述

同校幹事 文学士 岡倉覚三口譯

学生 塩沢峰吉筆記」

と記されている。筆記の時期は、当時は一学年が第一学期（九月～二月）、第二学期（二月～七月）に区分されていたから、明治二十三